

パブリック・コメント実施結果における市の考え方の変更箇所について

※令和7年11月27日の文化複合施設整備特別委員会 参考資料1から加筆した部分には薄い網掛け、削除した部分には取消線と濃い網掛けを引いています。

【施設コンセプト】

文化ホール施設は、P.27に記載のとおり、「青梅の文化の拠点となるだけでなく、市民が日頃から利用し、親しまれるもの」、「日常と非日常が交差し、こどもから高齢者まであらゆる世代が集まる「市民の広場」を目指す」としています。御意見にもありますが、市としては限られた方だけが利用する施設ではなく、あらゆる市民の方が日頃から利用し、親しまれる施設にしていきます。

【ホール形式および音響性能】

文化ホール施設のコンセプトは、P.27に記載のとおり、「青梅の文化の拠点となるだけでなく、市民が日頃から利用し、親しまれるもの」、「日常と非日常が交差し、こどもから高齢者まで、あらゆる世代が集まる『市民の広場』を目指す」としています。

このため、ホールの形式については、P.33に記載のとおり、音楽利用をはじめ、~~P.33に記載のある~~これまでの市民ワークショップなど意見聴取において御意見いただいた、こどもの職業体験や大人のディスコ、スポーツ観戦、各種フェス、ファッションショー等の多種多様なイベントを~~の開催するためを想定し~~、メインホールは移動観覧席としています。

移動観覧席については、文化交流センター多目的ホールのスタッキングチェアとは違い、客席がひな壇（段床）型に展開・収納するものを想定しており、P.34に記載のとおり、歩行音や揺れ、質感に配慮したものとすることで、他自治体にある固定席・段床型のホールと同等のものを整備できると考えています。

音響性能については、本計画書作成に当たって音響設計の専門家へ御意見を伺っており、良質な音響性能が確保できると考えています。今後の設計・施工段階においてもしっかりと専門家の御意見を伺いながら整備を進めていきます。

また、移動観覧席・平土間型の音響性能については、市民の方を対象に専門家を招いた説明会などを開催していく予定です。

本計画書に記載している移動観覧席は、ジャンル・スタイルを問わず、様々な演出のイベントが可能です。今後は、生音を含めた音響性能を確保し、クラシック音楽と多種多様なイベントが両立できる移動観覧席・平土間型を整備したいと考えています。

【移動観覧席に対する演奏家および観客の評価】

近年の移動観覧席・平土間型のホール事例として、2022年に開館した富山県氷見市の芸術文化館（800席）では、基本設計から工事完了まで音響設計の専門家の指導のもと整備され、ホールの残響時間は、段床客席

で舞台幕なしのコンサート形式で2.4秒、舞台幕ありの講演会形式で1.5秒となっています。(空席時500Hz)
このホールでは、著名な演奏家などによる様々なコンサートが開催されており、出演者や観客からは音響やホールの雰囲気について、高い評価をいただいているとのこと。

このようなことから、「〇〇〇〇」という御意見については、移動観覧席・平土間型であったとしても、固定席・段床型と変わらない音響性能が確保できることから対応可能と考えています。

【音響ガイドラインの作成】

良質な音響性能を確保したホールを整備するためには、ホールを含むそれぞれの諸室(部屋)に合わせた静けさを確保することが重要となります。このため、文化ホール施設の整備に当たっては、本計画策定後、「音響ガイドライン」を作成する予定です。

音響ガイドラインでは、メインホールにおける生音の音響確保のほか、サブホールや練習室を含む各室間の遮音、室内音響、建築設備の騒音振動低減対策、屋外騒音や振動の低減対策等具体的な指針をまとめていきます。

また、移動観覧席・平土間型の音響性能については、市民の方を対象に専門家を招いた説明会などを開催していく予定です。

【移動観覧席・平土間ホールの活用事例】

メインホールに移動観覧席を採用することで、段床席を利用するコンサートや演劇に加え、平土間空間ができることで、ジャンル・スタイルを問わず、地域のイベントや経済活動などを行うことができます。

近年の移動観覧席・平土間型のホール事例として、2022年に開館した富山県氷見市の芸術文化館(800席)では、良質な音響性能を活かし著名な演奏家などによるコンサートを開催するとともに、平土間空間を活用し、夏休み期間に「恐竜博」の展示を行ったところ、市内外から4万人を超える来場者があり、大変賑わったとのこと。

このように、移動観覧席・平土間型であっても良質な音響性能の両立は可能であり、音楽利用に加え、平土間空間を活用した合同企業説明会や各種展示会などを開催することで、賑わいの創出や稼働率の上昇が期待できます。

【サブホールの必要性】

ホールについては、文化交流センター多目的ホールの稼働率が非常に高いこと、市内文化団体等へのアンケート調査において、ホールに求める座席数として200席以下が最も多かったことから、300席程度のホールの利用ニーズが高いことがわかっています。

また、一般的にホールはコンサートや演劇などが公演される際に準備も含め数日間連続して予約されることがあり、このような場合は、サブホールを併設することで、小規模な市民利用のニーズに対応できると考えています。

このため、文化ホール施設では、600席程度のメインホールに加え、300席程度のサブホールを設ける計画としています。

【移動観覧席と固定席のコスト比較】

移動観覧席の整備費、保守維持管理費用については、市においてもメーカー等に概算金額を確認し、ホー

ルの座席に係る整備費および30年間の維持管理費について、それぞれ比較を行っています。~~の上行った試算~~
~~では、御意見にあるような大きな開きはありませんでした。~~

座席にかかる費用では、メインホールを固定席とした場合が約1億5,000万円、移動観覧席とした場合が約4億3,000万円となり、その差が約2億8,000万円となりました。

また、座席に係る30年間の維持管理費では、メインホールを固定席とした場合が約9,000万円、移動観覧席とした場合が約1億5,000万円となり、その差が約6,000万円となりました。

整備費、維持管理費について、移動観覧席・平土間型の方が費用は高くなりますが、市としては、平土間型のホールを整備することで、様々なジャンル・スタイル・演出のイベントが開催できることや、多くの方に御利用いただけるメリットの方が大きいと考えています。

【駐車場】

駐車場については、国施設および民間施設の建物配置や駐車場の相互利用の協議などが不確定であることから、今後の設計段階において、その状況を見極め、周辺の民間駐車場の状況も考慮しながら、~~における建物配置と合わせ~~必要な駐車台数が確保できるよう努めていきます。

【文化条例(憲章)】

文化ホール施設の整備に当たり、本市における文化政策の基本的な考え方や方向性を表した憲章等の重要性は認識しています。

一方で文化ホール施設は、これまでも市民の方々から早期の整備が求められており、憲章等の制定を見据えながら、P.28に記載のとおり、国の劇場法や文化芸術基本法に示されている劇場やホールの役割、市における文化芸術の必要性や役割などの趣旨を踏まえ、~~整備を進め~~適切に対応していきます。

【多摩産材・青梅産材の活用】

多摩産材の活用については、「青梅市公共建築物等における多摩産材利用推進方針」にもとづき活用していきます。

【文化交流センター多目的ホールとの棲み分け】

本計画書に記載されているメインホール(移動観覧席・平土間型)、サブホール(固定席・段床型)および平土間空間にスタッキングチェアを並べる文化交流センターの多目的ホールでは、それぞれ形式や設備などが異なってくることから、利用目的、公演内容、演出等に合わせて選択することが可能となります。

【環境対応】

環境負荷への配慮については、P.43に記載のとおり、文化ホール施設の整備に当たっては、ZEB Readyの取得を目指します。また、創エネ設備を加えたさらなる一次エネルギー消費量の削減について設計段階で検討していきます。

【飲食スペース】

カフェやレストランなどの飲食スペースについては、市民等からの要望も多く、施設の日常的な賑わいも期待で

きることから、文化ホール施設内に整備したいと考えています。しかしながら、P.37に記載のとおり、飲食事業者へのヒアリングでは現段階で出店可否を判断することは難しいと回答を得ており、飲食スペースの有無については設計段階以降も継続して検討していきます。

【こども関連機能】

こども関連機能については、P.26に記載の~~ある~~とおり、既存施設の活用等を視野に本事業とは別に整備を進め~~ます~~ることになりますが、文化ホール施設は、これまでと変わらず、こども・若者含むあらゆる世代が集まる「市民の広場」を目指し整備を進めていきます。また、大型児童センターについては、青梅駅、東青梅駅、河辺駅の3駅周辺に分散し、こども・若者の居場所として早期に整備していく方針としています。